

医芸歌壇



山の温泉

青森 秋霧 朝光

初春の畑いちめん霜柱矜羊ゆつたり玉菜食みおり

母漬けたる鱒の酢^{すし}届けられ年越し膳にふるさと香る

しがらみのひとつ切れたる夕暮れの山にかりし雲ちぎれゆく

煉炭の火に暖をとり客待つ山の温泉に老いひとりあて

音吸い降りしきる雪この静寂戦争炎書回居の地球

オルセー美術展

千葉 蒲谷 玲子

森描くにその葉ひとひらカンバスにのせて描きしアンリ・ルソーよ

愚直さを笑われてきしルソーなりいま「蛇使い女」万人の前

死者の上飛び跳ね渡る「戦争」の女神は白く猛き歯をもつ

「星降る夜」ゴッホ描ける川辺の風草の匂いも何故か懐かし

本物の名画に酔える心もて売店の絵は見る買わざる

きぼうし

東京 小松 安彦

川土手の赤詰草の花見れば少年野球の応援の声

右側に額あぢさゐが左には十葉の花あまた咲く道

夕立はいつしか止みて金草と五日月とが並びて光る

おそろくは巢のあるならむ公園のヒマラヤ杉に鴉行き来す

紫の擬宝珠の花眺めをり参院選のポスターの横

北陸の旅

神奈川 武井 忠夫

虹橋（琴橋）を琴に見立てて二本足のことでし灯籠池の端に立つ

（兼六園）

道の端に干物や餅の店並び人足繋ぎ輪島朝市

渚まで続くなごえに段々のモザイク模様の小さき水田（白米千枚田）

雪山を望み桜の咲きめぐる合掌造りの茅葺きの郷（飛騨白川郷）

樹齢七百年の杉並木並む七堂伽藍を回廊伝い見やり巡れる（永平寺）

鉛の右手

東京 田村 豊幸

脳卒中十年経ちし右腕が鉛の如しそれで字を書く

七夕にこの世の姫より電話くるあの世で多分思ひ出となる

父ちゃん顔もわからぬ母ちゃんに「長生きしてよ」と言いかねるかな

手足の移植可能いつ宇宙の旅より先にやっつてよ

認知症・物忘れするヘルパーと痴呆始めの医師四つトモエ

アジサイ

東京 初芝 澄雄

純青のアジサイを見て立ち止まりちつと見詰める鮮やかな色
満開のアジサイの花垣根越し鮮やかな青シャッターを押す
白い花ぶと足止めて眺めたり葉の形より柏葉アジサイ
散歩路横丁に入りはつとする大輪の花歩を止めて見る
里帰りアジサイの花わが庭に思いは湧きぬ若き日の事

定年哀歌

東京 林 宏匡

「養護」より「特別支援」に名を変へし学校を退く春惜しみつつ
心身に障害を持つ児童らを診つづけてはや三十六年
走る音 呼び合ふ声に励まされし校医の職を退くは寂しも
職員へ「メタボ」講演終りけり三十六年の感慨込めて
感謝状受くる身なれば寂しさのあふるる心抑へ難かり

奥飛驒

茨城 羽生 藤伍

上高地縫いて流れる梓川焼岳噴火に大正池造らるる
雪嶺は大切処せつとを中にして槍と穂晴れて左右に並ぶ
ジャンダルムとは憲兵の仏語なり西穂高岳を護るかに立つ
小川にも大きものあり道行けば食用蛙の響し音太し
田植え済み早苗は清し方形の基盤思わせ緑屋並ぶ

ネネズ

東京 横田 英夫

あざやかに島唄歌つ「ネネズ」琉球の鬻うきりりと結いて
桃色の琉装まとい三線さんしんを弾きつつ歌う床し島唄
懐かしき「安里屋あんりやユンタ」歌う時客席も和す「ツンタラヌシヤマ」
島唄は愛と喜び悲しみも沖縄人の心の叫び
還暦を過ぎし息子は「ネネズ」の島唄聞きて涙して居り

編集後記

()

500号は11年前の4
月号。それからの歩みを顧
みて、よく600号までた
どり着いたという思う。目
次を見比べると、投稿者の
数が圧倒的に違う。残念な
がら他界された方々のお
名前も多い。こついつ先輩
方の力が受け継がれて、今
日まで続いてきたのであ
る。次の一步をしつかり
と踏み出して行きたい。

特集記事のうち、珠玉
篇ともいえる「座談会」は、
安井廣迪先生の尽力で復
刻版として残せたのは幸
이었다。また数多く残っ
ているがこれからの保存
法は電子文書になるのだ
る。その一方で、掌に重
みを感じながら、パラパラ
と頁をめくる楽しさも残
したい。なんで？この人が
という意外な名前を発見
思わず読み耽った。